Mysticism without Bounds に参加・発表

堀内みどり

標記国際会議が、１月５日～８日を会期にして、インドのバンガロール市にある Christ University（クライスト大学）で開催された。およそ、130 の発表があり、堀内は「*Fushigi*: From A Tenrikyo Perspective」と題して発表し、５日午後の第４会場セッション３および４のモデレーターを担当した。

開催者は、Christ University（短期大学部が主体、宗教や宗派などの関係なく学生を受け入れている）と Dharmaram Vidya Kshetram（DVK、キリスト教徒の学生）が担当。両者は Dharmaram College（神学校）と、同じ敷地内にあり、学生数 12,000 人を超える。また３大学の経営母体は、Carmelities of Mary Immaculate（CMI：無原罪のマリアのカルメル会）で、1831 年ケララ州で K.E.Chavara 神父によって創設された。学内にはチャペルとセミナリオがあり、セミナリオでは 200 人以上の男子学生が修道士になるために学んでいる。

クリスマスのために設えられた「イエス誕生」の人形、
日が落ちると学内はイルミネーションが点灯された。

４日午前の便で出発し、バンコクで乗り換えて４日午前０時過ぎに現地到着。大学の宿舎に着いたのは１時半を過ぎていた。５日午前８時半から受付が開始され、同日午後から本格的に学会が始まった。また、８日深夜（９日午前１時）の便でバンコクを経由して９日午後７時頃に帰国した。

５日行われた開会式は、大学講堂（2,000 人収容）で、今回の国際会議を構成しているイベントパートナー（インド、イタリア、ベルギー、ドイツの合計８つの大学と研究機関）と開催校の代表による献灯式から始まり、主催者および来賓によるスピーチ、瞑想の実践などの後、５会場に分れて研究発表があった。初日であるこの日は、午前中に基調講演が行われた後、午後から４つのセッションで、20 の研究発表が行われた。夕食は Dharmaram College の講堂での基調講演のあと、主催者主催の歓迎レセプションがあった。６日、７日は、９時から講堂での基調講演の後、午前中にセッション１～４、午後にセッション５～８およびセッション後に基調講演が行われた。最終日（８日）は基調講演の後、午前セッション１～４、午後セッション５～６の研究発表が行われ、総計 126 の発表となった（要約集には 130 の要約が掲載）。また、すべてのセッションが終了したあと、総括セッションが講堂で行われた。そこでは、大会の運営に携わった多くの教職員、とりわけ学生たちの活躍が讃えられた。なお、６日は文化公演（学生によるダンスと音楽）・夕食会、７日には、大会主催の夕食会が盛大に行われた。

メイン会場となった Christ University ３階の講堂（Auditorium）で行われた文化プログラム。１階および２階の教室で研究発表が行われた。２階には PC 室があり、自由に使用できるようになっていた。

「Misticism without Bounds（境界なき神秘主義）」と題された今回の国際会議を開催するにあたり、主催者は、以下のように述べている。

> 神秘主義（mysticism）は、ギリシア語の mystikos に由来することばで、究極の真実（リアリティー）、神性、精神的（霊的･宗教的）真理あるいは神とのコミュニケーション、同一化または意識的覚醒の探求を意味している。「境界なき神秘主義 2011（Mysticism without Bounds、短縮して MwB2011）」と題されたこの国際会議は、異なった学問分野、たとえば、宗教（ヒンドゥー教、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教、仏教、道教など）、科学（生物学・生態学、新物理学、神経科学、論理学）、人文科学（哲学、神学、スピリチュアリティ、心理学など）および芸術およびその表現（詩、音楽、舞踊、映像表現、儀礼・儀式、オカルト）から、「神秘的意識」を探ろうとする試みである。
>
> MwB2011 は、神秘主義が異なった学問分野の中で、人間性の本質的な統一性について一つの気づき（覚醒）を創りだす可能性があるという学際的な視野に立ち、世界中の研究者が一同に会し、それぞれの見解や論評を交換し合い、その調査や発見を蓄積し、さらにそれぞれの専門知識や経験を共有することを目的とする。

主催者が各分野からの発表を期待した結果、さまざまな内容が含まれたが、宗教関連では、エジプトのスーフィーやインドのシークの神秘主義についての発表があった反面、神人合一の境地が伝統的に主流ともいえるヒンドゥー教からの発言が少なかったように感じられた。また、哲学的分野からの発表はその数も多く、ウィリアム・ジェームズやシェリング、西田幾多郎、鈴木大拙などが取り上げられ、活発な意見交換や質疑応答があった。

平城遷都 1300 年祭に雅楽部が参加

佐藤浩司

昨年は、西暦 2010 年、藤原の地より奈良に都を遷したのが 710 年であるから丁度 1300 年となる。奈良ではこれを記念して、1 年間（平城宮跡の行事は、4 月 24 日から 11 月 7 日まで）平城遷都 1300 年記念祭として各種の行事が開催された。天理大学雅楽部は、地元ということで、種々のイベントのお手伝いをする機会を得た。ここでは、平城宮跡会場において、春、夏、秋の三季に分けて催された行事で、雅楽部が関わった分についてのみ、ご紹介する。

まず、春の行事として 5 月 3 日と 9 日の 2 回、見事に再建された大極殿へ向けて、平城宮跡の 3 ヶ所よりパレードが行われた。雅楽部は、伎楽の行道と道楽でパレードの先導を勤めた。5 月 3 日は、晴天に恵まれ、既に 30 度を超える気温の中、しかも木陰一つないところでのパレードであったがため、参加者が熱中症で次々に倒れる始末。殊に、道楽は、陪臚を演奏したのだが、朱雀門から大極殿前のステージまでの長距離に加え、13,000 人のパレード参加者が、ステージ前に集合するまで演奏をし続けたので、結局、36 回繰り返しての凄まじい演奏となった。夏の行事は、7 月 24 日、まほろばステージにて「全国雅楽フェスティバル」が開催され、舞楽「太平楽」で出演した。

10 月 8 日、天皇皇后両陛下のご臨席のもと、記念祝典が開催された。まず、祝典参加者を歓迎する曲として「皇麞急」を演奏した。祝典の役割を担う武官の登場に道楽で「陪臚」を演奏した。続いて、会場を清めるために、赤米入りの袋を振るという演出には、夜多羅拍子の「抜頭」を通常の倍速で演奏した。最後に、「奈良・アジア友好の架け橋」と題されたミュージカルでは、大団円となるところで伎楽を演じた。祝典の模様は、NHK 総合 TV で生中継の予定であったが、臨時国会の開会と重なって中止となり、翌日録画が放送された。

10 月 9 日から秋の行事が始まり、秋の行事の目玉は、古代行事の再現である。東院庭園における「曲水の宴」（10 月 9、11、16、17、23、30 日、11 月 3 日）では、管絃「五常楽急」、「皇麞急」、「陪臚」、舞楽「柳花苑」を、大極殿前特設ステージにおける「相撲節会」（10 月 10 日）では管絃「五常楽急」、「陪臚」、勝負楽として「納曾利」「蘭陵王」を舞った。第二次大極殿跡における「射礼」（10 月 24 日）では、管絃「五常楽急」、「陪臚」、舞楽「太平楽」、大極殿前庭における「蹴鞠」では、管絃「五常楽急」、勝負楽として「納曾利」「蘭陵王」の一部を演奏した。この他、「騎射」、「平成散楽」があったが、「騎射」は、雅楽の演奏で馬が驚くかもしれないという理由で、「平成散楽」では、散楽が雅楽と関連があるということがご存知でなく、演奏のお手伝いができなかったのが、惜しかった。12 月 31 日、粉雪のちらつく大極殿前で、閉幕式があり「陪臚」の道楽で参加者の入退場を先導した。

期間中、平城宮跡への総入場者数が当初の予定を遙かに超える 363 万人であったとの報告である。一応、成功といえるであろう。古代行事の再現に当たっては、6 年前の企画の段階から関わったものとして、当初、単発的な行事として終わらすのではなく、現代の人にとって意義のあるものとして後々にも続けられるものをと要請した。この思いは、一通り行事が終了した今、より一層つのる。

（8 頁からの続き）

団である。7 世紀までその地でのキリスト教を代表していた。しかし、イスラム教の進展とともに、イスラム教に改宗するものが相次いだ。そのために、残ったキリスト教信者は隠遁生活を余儀なくされた。16 世紀にヨーロッパ人と接触してコプトとして認められ、ヨーロッパの中にもエジプト人を中心として広がっている。ローマにもコプトの教会がある。

ローマ法王は、これらの一連の出来事を大変憂慮している。元旦と 2 日のアンジェルス（法王のお告げの祈り）でもこれらの出来事に言及している。平和というのは具体的な目標なのだ。社会的にも政治的にも人間が実現しなければならないことだという。キリスト教徒は、平和への道を歩もうとする政府や民衆を助けていると述べている。

ローマ法王をはじめとして、イタリア政府、EU の首脳たちは、キリスト教徒が迫害を受けている国々では「信教の自由」が欠如していることを訴えている。

世界中で、憲法上「信教の自由」を認めているのが 194 カ国である。しかし実際には、世界の人口の 70 パーセントが「信教の自由」を否定されているのだ。宗教対立による犠牲者を 100 人とすると、その 75 人がキリスト教徒であるという。今でもキリスト教を信じているために、世界の 5,000 万人のキリスト教徒が危機にさらされているという。

（4 頁からの続き）

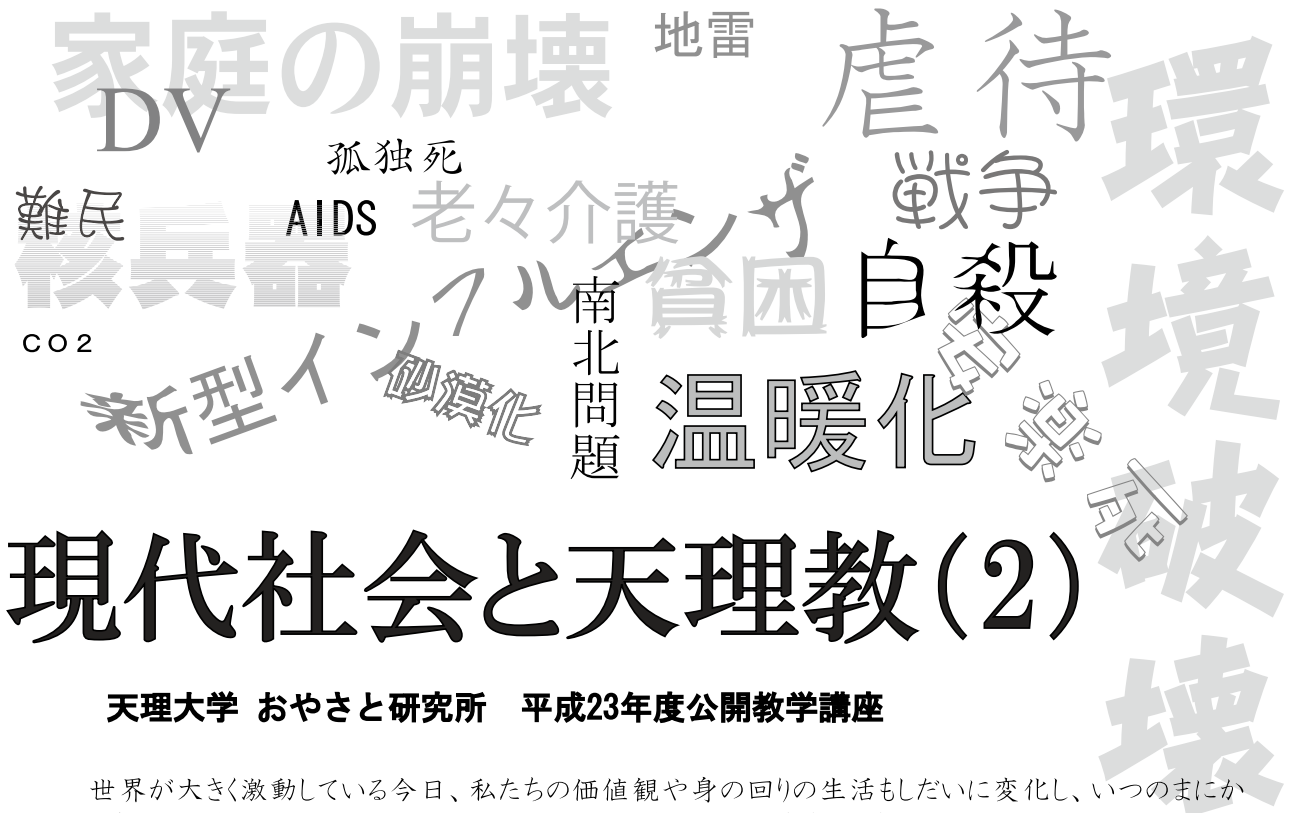
されたものも含まれている。また、天理教における上海伝道庁のようなこの地域における統括組織の施設はこの数には含まれていない。施設数の後に「駐在教師○○人」としたのは、「附（駐在教師）」（仏教各宗派では「附（駐在布教師）」となっている）の後に記されている人名の数。例えば、天理教の場合、駐在教師には伝道庁長をはじめとする伝道庁勤務者などの名前が記されている。なかには施設名がなく、駐在教師だけが記されている教宗派もある。尚、一部を除き人名の後に日本の地名が括弧付で書かれているが、これは戸籍地であろうか。

（3）本稿ではこの部分の漢字表記は現代表記。明らかに誤植と思われる部分については訂正した。たとえば「2．天理教中華教会」の「②原澤千加栄」が原文で「②原澤斗加栄」となっていたり、「6．天理教肥和教会」の「③金子ナホ」が「③里子ナホ」、「5．天理教揚子江教会」の「④ 77」が「③ 77」となっていたりしている。ほかにも原文の表記には誤植があるかもしれない。尚、信徒数の後の（日）は日本人、（中）は中国人を意味し、原文通りの表記である。

（次号に続く）

天理スポーツ関連シンポジウム
「未来を創る！ ～天理 障害者スポーツ～」
開催のお知らせ

天理スポーツ関連シンポジウムを **3 月**に開催する予定です。なお、日時や場所、プログラム等に関しては次号でお知らせ致します。



現代社会と天理教(2)

天理大学 おやさと研究所　平成23年度公開教学講座

世界が大きく激動している今日、私たちの価値観や身の回りの生活もしだいに変化し、いつのまにか多様な価値観が生まれてきました。しかしその価値観は、ややもすると利己的な価値観となって、「我さえ良くば、今さえ良くば」の風潮を拡大・助長する危険性をもはらんでいます。そのような現代社会の中で、私たちが日々考え行動する拠り所は、常に天理教の教えに基づくことは言うまでもありません。

この講座では、「現代社会と天理教」というテーマのもと、2年間にわたって天理教の教えに基づく生き方、行動のあり方を、現代社会における具体的事例の中から考え、今年度は後半として下記テーマに基づいて講座を開講します。

第1講　4月25日(月)
佐藤浩司　自死 ―死ぬなよ

自ら死を選び、実行する人が後を絶ちません。我が国では、若年層から高齢者まで年々増加の一途を辿っています。官民あげてこの問題に対しての良策を探っています。自死を思い止めることができるのは何でしょうか。与えられた生をそのまま全うするために。

第2講　5月25日(水)
森　洋明　つなぎ―デジタル化社会のアナログ思考

さまざまな分野におけるデジタル化の波は、日常生活の中で私たちの物の見方や考え方にも大きく影響しているのではないでしょうか。そこで、アナログ的な姿勢としての「つなぎ」のあり方を見直し、その重要性を再確認したいと思います。

第3講　6月25日(土)
辻井正和　古い道と新しい道の間

1980年前後から日本の社会や人々の意識は大きく変わりました。しかし、「古き道があるから新しい道がある」と言われるため、新しい展開にはいつも疑問が呈されてきました。「古い道」と「新しい道」の関係をどう理解するのか、おさしづに基づいて検討してみたいと思います。

第4講　7月25日(月)
佐藤孝則　教えに基づく環境保護活動の実践例

環境問題は多岐にわたる学際的課題であり、その因果関係は複雑です。まして、価値観が多様化する今日では、解決策を見出すのは容易ではありません。しかし、教えに基づく生き方はそれほど複雑ではないと考えます。実践例を通して考えたいと思います。

第5講　8月25日(木)
深川治道　選択と不選択―教えとともに生きる道

今日、様々な人々によって生成された多様な情報が提供され、多様な選択肢が我々に提示されています。このような状況において、身近な事例から我々自身のあり方の選択について考えたいと思います。

第6講　9月25日(日)
野口　茂　世界の難渋に心を寄せて
―いま求められる共感の力―

貧困や自然災害、紛争など世界の難渋に心を寄せて、ひとの難渋を我が事として地道に支援活動を続ける人々が多くいます。彼らの心に通底する共感の力に着目して、たすけあいの意味を改めて考えてみたいと思います。

第7講　10月25日(火)
井上昭洋　おぢばがえりの巡礼論

宗教の聖地を尋ねる旅を巡礼と呼ぶならば、おぢばがえりも巡礼と言えます。おぢばがえりを巡礼と捉えると何が見えて来るのでしょうか。おぢばがえりの歴史を振り返り、現代社会における巡礼の意味、私達にとってのおぢばがえりの意義を再考したいと思います。

第8講　11月25日(金)
金子　昭　“無縁社会”への処方箋
―「たすけ合い」社会再構築に向けて―

年間の自殺者3万人、孤独死3万2千人。家族のきずな、社会の結びつきが解体しつつある今日、今こそ天理教者が内なる世直しの波を巻き起こし、互いがともにたすけ合う世の中へと建て替えていく旬が来ました。NPO・NGOを活用するなど、新しい社会だすけの処方箋を皆様と共に考えてまいりたいと思います。

第9講　12月25日(日)
深谷忠一　かんろだい世界への道
―目ざすものとその道程―

新幹線で東京に行って、大阪に着いたと思って訪ねる先を探しても、ぜったいに見つかることはありません。また、大阪に着いても東京の地図を使っていては、目的地を見つけることはできないでしょう。私たちの目ざす「かんろだい世界」はどういうところなのか、そこに至る正しい道路マップはどういうものかを考えてみたいと思います。

場所：天理教道友社６階ホール
時間：13：00～14：45　　＊お車での来場はご遠慮下さい。

第７回伝道フォーラム

「ネパールの天理教」

入場無料・来聴歓迎

天理教のネパール伝道は、1960年中山正善二代真柱のネパール巡教が端緒とされている。ネパールは、宗教的には包容力のあるヒンドゥー教および仏教が渾然一体となっている文化背景を持つ一方、世界の最貧国の一つとしても知られている。それゆえ、天理教の教えを聞いてはくれるけれども、その理解の実際は捉えにくいともいえる。経済的な理由から、「日本」人と親しくするということも考えられる。社会的政治的にも、長い鎖国政策やインドと中国とに挟まれた地理的要因から、両国の影響力は甚大である。ヒマラヤ山脈は、ネパールを陸の孤島にする要因ともなって、２大国への依存度は非常に高い。

こうした背景を持つ国での布教は、①多神教世界への布教、②経済格差のある地域への布教、③多民族／多言語国家での布教、④国教（現在は規定なし）との関係、⑤カーストへの対応など、いくつもの視点が必要となる。

今回は、そのネパールで初代の連絡所長を務め、長くネパール布教に携わってこられた大向良治氏をメインの講師に迎えて、ネパールでの布教伝道の特徴などについて語っていただく。また、現在、天理大学に学ぶ２人の学生に自らの天理教体験を話してもらい、ネパールをより理解したいと考える。

講演者

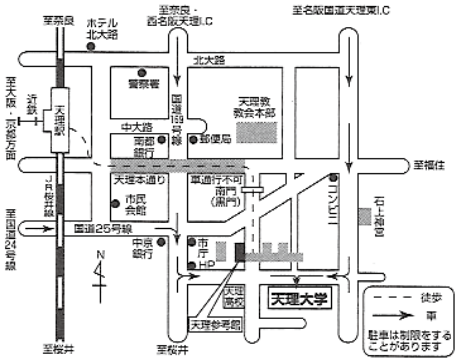
＜題目は仮題＞

大向　良治（天理教ネパール連絡所初代所長）
「ネパール連絡所の始まり」

成田　道広（天理教海外部翻訳課）
「天理教ネパール布教の現況概観」

ビヴォール・ヴァルマ（天理大学国際学部１年）
「親からの信仰」

ラジェンドラ・タパ（天理大学国際学部２年）
「入信の動機と天理大学」



日時：平成23年3月25日（金）
午後1時から

場所：天理大学研究棟３階第１会議室

問い合わせ先：
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050
天理大学 おやさと研究所
FAX 0743-63-7255　E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

グローカル天理
第 12 巻　第２号　（通巻 134 号）
2011（平成 23）年２月１日発行

ⓒ Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者　深谷忠一
編集発行　天理大学 おやさと研究所
〒632-8510　奈良県天理市杣之内町 1050
TEL　0743-63-9080
FAX　0743-63-7255
URL　http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm
E-mail　oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷　天理時報社
Printed in Japan